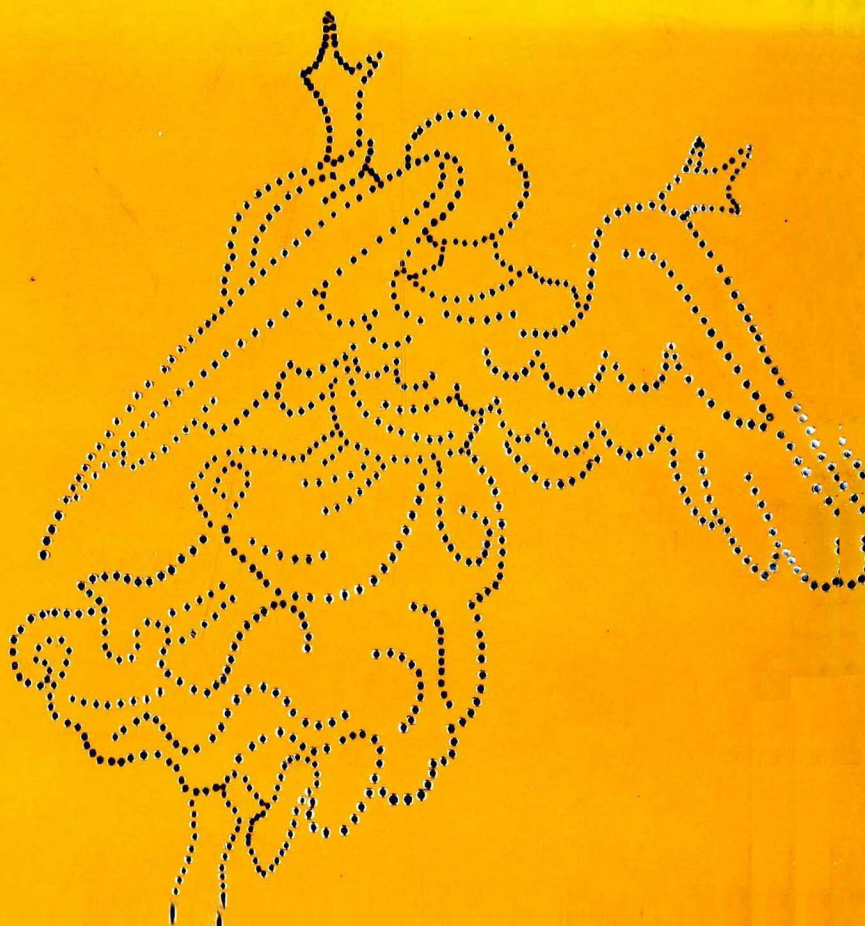


天使をこの手に

光の世界を阻まれた一盲人の記録

ロバート・ラッセル

佐伯わか子訳



天使をこの手に

ロバート・ラッセル

佐伯わか子訳

みすず書房

ロバート・ラッセル

天使をこの手に

佐伯わか子訳

1975 年 12 月 1 日 印刷

1975 年 12 月 10 日 発行

発行者 北野民夫

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷 3 丁目 17-15

電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京 195132

本文印刷所 新興印刷

扉・カバー印刷所 栗田印刷

製本所 鈴木製本所

© 1975 in Japan by Misuzu Shobo

Printed in Japan

書籍コード 0097-11591-8005

落丁・乱丁本はお取替えいたします

父上母上の暖かい思い出と
ラリー、バド、ジャック、ジミー、
メアリー、ハニーの兄姉とに捧げます

まえがき

子供のときから、私はひとにじろじろ見られてきた。ショーウインドウをのぞきながら街をぶらついている人も、私が通りかかるとびたりとお喋りをやめ、私が通りすぎてもうきこえないと思うと言うのだった。「ひどいことねえ!」

こみあっている交差点の横断歩道で手をかしてくれる人は、その好奇心を抑えかねて私に問いかけるのだった。

「どんなですか？ ただのくらやみ？ 真夜中のようにまっくらなんでしょうね？ 妙なぐあいでしょう。もっとも第六感がありですよ、あなた方は。そう聞いています。不思議ですね!」

私は自問する、「私はそんなに不思議な人間か?」

そして結局彼らは正しいのだと結論する。私は変っている。しかし同時に私は確信する。その問いかけた通行人たちも、もしその問いを自分に向けてまじめに考えるなら、自分たちも同じだという結論を得るはずだと。われわれはみな変っている。一人一人異なった特徴をもつ個人なのだ。分離され、独自

の存在であるという孤独感、共通の生命を分かちあうことでやわらげられる。われわれは同じ希望に胸をおどらせ、同じ怪物の前にたじろぐ。そしてとくに、われわれはだれでも十分の知識なしに行動することを強いられる。結果を予見できぬままに、経済的に、情緒的に、知的に、靈的に自らをコミットせねばならず、その結果はとりかえしがきかない。両親も、教師も、政治家も、すべてめくらの手をひくめくらにすぎない。

そのゆえに人びとはとくに盲人に関心があるのかもしれない。手さぐりで歩む盲人の不たしかな足どりに、彼らは無意識のうちに、自分たちの見えないものにむかう不安定な足どりの象徴を認めるのかもしれない。したがってこの私の物語は、そのまま読者の物語でもある。状況や事件は当然異なっている。しかしその表面的な差異のかげにあるのは、人間として共通の課題である。すなわち安住している慣れた環境をあとにして、未知の未来に踏み出すということである。

ひとは精神的にも肉体的にも前進する動物である。前進するとは、世界を後へ後へとおしやることである。この険しい人生行路において、一步一步にその全存在を賭けるわれわれはすべて盲人である。これは私の生涯の前半の物語である。当然それは動きの多い物語となる。若いときは、未知への挑戦をうけとめようとする衝動の強い時期でもあるから。

目 次

まえがき

第一部 影にある谷間

1 落ちる 9

2 黒いカラス、白いカラス 20

3 天使をつかむ 23

4 不適応 32

5 盲人のいたみ 40

6 サタデー・レビュー 53

7 もう一つの世界 62

8 スティーブ 68

9 少年期のおわり 75

10 思い出と希望 81

第二部 登山口

11 出発と到着 87

12	春に至る	104
13	トロリー車と押しっくら	
14	明白なものを探し求めて	
15	メアリーとフエイス	148
16	悲しみは人それぞれに	159
17	職を得る	169
18	車輪はまわる	177
	第三部 中 腹	
19	道なき道をわけいって	195
20	海外留学	207
21	ものうからざる探求	229
22	もっといいこと	247
23	強いられた後退	265
24	行つて、もどつて	278
25	"静かならざる所有"	292
	訳者あとがき	

第一部 影にある谷間

1 落ちる

一八七〇年代のビンガムトンは、あまり開けていない騒々しい町であった。二十年前、それはニューヨーク州の南部、ペンシルベニア鉄道のすぐ北、チェナンゴ川とサスキエハンナ川とが合流する地点につき出した静かな集落であった。当時は川に面した水運の要所で、肥沃な谷間に点在する農村からの産物の集散地でもあった。七〇年代になると鉄道が水運にかわり、川には時たま広底舟が一頭か二頭のラバにひかれて往き来するのが見られるだけであった。

鉄道が敷設されると町はまるで眠りからさめたように活気づきはじめた。町は大きくなるにつれ、ざわめきにみちていた。二つの川をのりこえて町は広がり、新しい商業と繁栄を歓迎するために手をのばすように、堤防にそって木の枠組の家並みがのびはじめた。

川の近くの裏通りで、私の父ジム・ラッセルは生れた。楽天家の移民の靴屋と働き者のアイルランド系の妻とのあいだの二番目の男の子であった。彼は母親から勤勉と実務性を、父親からはユーモアのセンスと夢みる能力をうけついで。一見不調和と考えられるこれらの相反する性質は、彼のうちにあって

みごとに統一されていた。

ジムは十四歳で八年制の初等学校を出るとすぐ、生計を助けるために働きに出た。大きなたばこ工場に就職し、帳簿係となった。そして数年の後、主任帳簿係となった。二十代そこそこの青年としては異例のことであつたし、まだまだ昇進しそうであつた。

ある夜、ダンスパーティーでメイ・クラークという少女に出あつた。彼女はワシントン市からビンガムトンの近くに住む従兄弟をたずねてきたのだつた。彼女は赤みがかったゆたかな金髪の少女で、その眼はきらきらかがやいていたが、それは彼女の心の柔軟さと同時にその強さを示していた。彼女はほんの十五歳、ジムは二十五歳だったが、ダンスパーティーから戻るとき彼の心は決つていた。メイ・クラークと結婚しよう。しかし結婚の申しこみをするときに他人に雇われていることをいさぎよしとしなかつた。まず独立すること。工場主が彼を引きとめようとしていろいろな条件をもちだしたが、その一切を断つて彼は退職した。一九〇二年、友人のダン・オブライエンと共同経営でラッセル・オブライエン宝石店を開いた。その店はその後四十五年間コート街で小さいけれど気のきいた店として続いた。

五年後にジムはメイ・クラークと結婚した。男の子が四人続いて生れた。ラリー、バド、ジャック、ジミー。次いで女の子が二人、メアリーとハニー。私は一九二四年に彼らの末子として生れた。

私の最初の記憶はエドワード街十三番地のわが家、三階建の大きな家でクリーム色でふちどりしてあつたが全体は緑色だつた。宏壮とまではいえないがしっかりした建築で、それを自分の家族のために建てた富裕な材木商のすぐれた好みをあらわしていた。建物の前には広いポーチがあり、裏庭も広く、そして数頭の馬と馬車をいれてもまだゆとりのある本式の納屋があつた。これはやがてわが家の一九二八年型パッカードの車庫となつた。

ある日、私はすぐ上のハニーとかくれんぼをしていた。私は家のわきにつきだしている煉瓦の煙突のかげにうずくまって隠れていた。とつぜん私は強いモーターの低いうなりを耳にし、黒い大きな自動車が入ってくるのをみた。父さんがパイプをくわえてハンドルを握っていた。父さんは少年のように誇らしげで、「見てごらん、買ったんだよ!」と叫んでいるようにみえた。

「母さんはどこ?」私が返事をするひまもないうちに母さんはエプロンのままとびだしてきたが、その顔はびっくりし、ついであれしさががやいた。その自動車は本当に私たちのものだった。ドライブに行こう。私もでかける用意をしなくては。母さんは七人の母親でなければできないように手早く私の顔と手を洗ってくれた。おまけに日曜日用にとつてあったま新しいびかびかのグリーンのスーツを着せてくれた。それから一家そろって出かけ、町中をわがもの顔に乗りまわした。天にもものぼる気持だった。

小ぎれいな芝生を前にした白い家の並びが午後の陽ざしの中で眠っていた。道路わきで遊んでいた子供たちは遊びの手をとめて、りっぱな車に乗ったりりっぱな私たちを見物した。玄関のポーチで一服していた奥さんたちは立ち上り、美しい黒い車がよく見えるようにと手すりの方に身をのりだしていた。

家に帰りつくと、家族は集って互いに喜びあっていたので、私がこっそりぬけだして家のわきを通りぬけたのに気づかなかった。彼らの目の届かぬ地点へくると私は納屋めがけて、車めがけて一目散に走った。何とすばらしいくるま! 私はびかびかの黒いフードやフェンダーをそつとなでてみた。これほどすばらしいものが他にあるだろうか?

私は車輪の横の床に坐りこんだ。車輪も黒だったが全部ではなかった。中心のハブキャップは銀色で、そのまわりにグリーンの線が二本ひいてあった。黒、グリーン、銀色の配色は私の創造力をかきたてた。

グリーン、銀色、黒の車輪は何と美しい！　しかしこれに青を加えると……。

そうだ。私は思い出すとび上って納屋の一隅に走った。やっぱりそこにあった。青のエナメル。しかもふたはあいていた。棒でかきまわして、その棒をブラシがわりにして塗った。エナメルはどろどろしていて大きなかまりがくつつくので、私は少しでも上手に塗って車輪を美しくしようとひどく苦心した。

私はかなり手早く仕事をしたにちがいない。車輪を塗り終って、まだフードとフェンダーにとりかかるだけの時間とエネルギーの余裕があった。しかし古来多くの名工たちと同じように、私もその仕事を完成させる時間と機会は与えられなかった。足音が近づいて納屋の戸が開けられ、あつという抑えた声が聞えるやいなや私は袈くびをつかまれた。かわいそうな私の芸術と私のおしり！　どちらもその日ささんさんな目にあった。ま新しいスーツも……美しいグリーンのスーツは今や青スーツに変っていた。母さんはそのスーツを脱がせるとくるくるとまるめてごみ入れ籠に放りこんだ。

四人の頑丈な兄たちがテレピン油を使って大ふんとうしたにもかかわらず、その車は十年間酷使された後まで私の栄光の跡をとどめていた。

そのいたずらの罰としての外出禁止もやがてとかれて、私は再び近所の子供たちと遊んでいた。なかでもチャーリーという子とは大の仲よしで、くるまを塗った事件からまもなく、二人はうちから少し離れたところの家で引越しがあるのをかぎつけた。

私たちは引越しが終って最後の家具が運び出されるのをまちかねて、何か残っていないかとそのあき家を探険に出かけた。その家にしのびこんでさがしはじめた。カーテンを取りはらわれた窓から見つからないようにと床の上をはいまわったが、私の心臓は興奮と怖ろしさでどきどきしていた。冒険の大胆

さが私の心を怖れでみたした。はだかの床を照らす太陽の光線は黄金色のプールをつくり、そのふちはくらやみに解けていた。暗い押入れも戸が開けはなたれ、ホールにある階段はしいんとした二階に続いていた。

私たちがびくびくしていたのは、幽霊が出ると思ったからではない。からっぽだったからだ。からっぽの家はどんな想像の産物でもみたすことができる。

私は、私の創りあげたものをくわしく述べることはできない。そのあき家をみたしていた幻のかげをはつきりつかむことはできなかった。それらは私のまわりをみたしていた。のっぽで暗いものが部屋のすみのかげのところにひそんでいたし、はねのはえた何ものかが二階の静寂の中でとびまわっていた。小さな精霊は光の矢の中でおどっていた。私は私の中にあるふしぎな力がとつぜん活動をはじめたのに、おどろき、また魅せられていた。途方もない想像力。

二人とも小声でささやきあい、暗黙のうちに二階へはいくまいと決めていた。どちらもそのことは口に出していなかったが、チャリーも同じようにこわがっているということがわかった。

二人は階下を全部探しまわったが何一つみづからなかった。私たちは裏口から外へ出て、ガレージに向った。ところがそこまでいかないうちにとつぜんチャリーは歓声をあげた。ポーチの下に箱があるのを目ざとく見つけたのだった。二人でその箱をひっくり返すと中から古いクロケの道具が出てきた。二人はそれ以上探検することなど忘れてしまつてその戦利品をかかえて家へ戻った。チャリーの方が年長だったし、体も大きくおまけに最初にみつけたのは彼だったので、私は戦利品は当然全面的に彼のものだと思っていた。

彼は宝物を自宅へもち帰る前に、私にその中から一本のマレット（打球用のつち）を渡してくれた。

私はそれですっかり満足して家へとんで帰った。何かすばらしいことをして遊ぼう。しかし一体何ができるだろう？ マレットはどうやって使うのだろう？ ボールがなければマレットは何の役にもたてはしない。そしてボールは全部チャーリーが持っていてしまった。マレットはかなづちのような形をしていたので何かをたたいてみようと考えた。家の裏口近くでたたくことのできるものといえばポーチの窓ガラスぐらいしかあたらなかった。しかし私はいくらをたたいて罰をくらったばかりだったのでした。たたくポーチの一番下の段に腰かけて石をたたきはじめた。

適当な大きさの石をみつけたして、緑の芝生に接しているコンクリートの歩道の上に正しい位置において、ねらい定めてマレットを打ちおろすという作業に、五歳の子供らしく私はすべてを忘れて熱中していた。大工さんはすてきな。ぼくもいつか本物の大工さんのように釘が打てるようになるだろう。こんなふうに。パシッ！ それは運命の一撃だった。

マレットの柄が裂けて、裂片がとび私の左の眼球にささった。悲鳴をあげて、血がどくどく流れるままに私は乱れる足をふみしめて裏口の段を上った。ジミーがとびだしてきて母さんと呼んだ。私はすぐに目のところをぐるぐる巻きにされ、母さんにつれられてタクシーで医者の方へ走った。医者は鎮静剤をくれたのであろう。私はそれ以上何も記憶していない。

当時の医学では左の眼の障害や失明がどのようにして右の眼に移るのかわかっていなかった。感染を防ぐ唯一の方法は左の眼を摘出することであった。それは医師にとっても、また私の両親にとってもまことに荒っぽいやり方と感じられた。しかもそれはむだ骨に終るかもしれないのだった。

そのことがあってから、あと何週間も父さんは夕食のたびごとに私に同じ質問をくり返すのだった。

「ロブ、今夜の私のネクタイは何色だね？」